

あんげろす

ミルトン『失樂園』の研究から

ジョン・ミルトンといえは17世紀イギリス革命期のピューリタン詩人として、思想史、英文学史において欠くことのできない存在である。ヒト・モノ・カネが国境を越えて自由に移動する経済のグローバル化が進行しつつある現在、ミルトンの作品に対する帝国論的解釈が盛んである。とりわけ晩年の大作『失樂園』（1667年初版）をめぐっては枚挙に暇がない。ミルトンは、サタンを「冒険商人」として描き、新しく作られた世界を「新世界」という言葉で表現し、人間の墮落をサタンによる「購入」という商業用語を用いて説明しているのではないか、等々。この作品の白眉は、第12巻において、アダムとイブが樂園を喪失し、二人だけの寂しい路を辿っていく箇所にあることはいままでもない。そこで、ミルトンは、プロテスタントの勤勉によって繁栄をもたらしているオランダを「マモン」として批判し、アダムをして、マモンのように「小事」から「大事」へと発展するのではなく、「小事」をもって「大事」をなすことを説いている（556行）。オランダやイギリス帝国のように「小事」から「大事」へと発展する際には、勤勉による労働や科学技術が用いられるが、それは人間の能力を重視するために人間の「思い上がり」を生む。それに対して「小事」をもって「大事」なすということは、「一見弱そうに思えるものをもってこの世の強大なものを世俗的な知恵を破るといった風に」「お前の知識に、それにふさわしい行為を加え、信仰を加え、美德と忍耐と節制を加え」ることであると述べられている。

「小事」をもって「大事」なすというミルトンの命題こそ、熾烈な世界経済競争のなかで科学技術立国を標榜するわが国の教育に、キリスト教教育が付け加える事のできる「大事」なのではないだろうか。



大西晴樹

第40号
2006.6